

無聊吟社句集

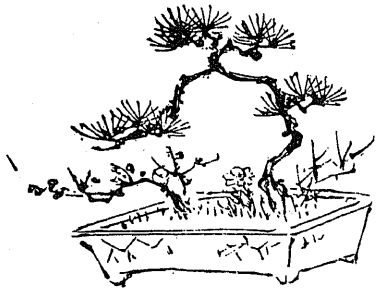
鹽野奇零

金襴の製装にふれたり花郎花
 秋老ひし不二の姿や夕まぐれ
 煙立つ家とならふや秋の山
 葉隣れの熟柿をねらふ小猿かな
 輪馬堂の繪馬吹き落す野分かな
 山の端に星の流れて野分あと
 白萩や戀にすねたる若き尼
 牛曳て出る家低き花野かな
 夕日さす野中の塚や赤蜻蛉
 鳴啼くやまだくれきかぬ夕あかり
 雲一朵ちぎれて飛ぶや秋の空
 耳につく時計の音やきりくす
 見れば又菊作る氣になりにけり
 無造作に出来て威のある案山子哉
 棉干すや此頃多き赤とんぼ
 焚火して酒温むる木賃かな
 雁渡る堅田の月や浮御堂
 宿直の先生を訪ふ夜寒かな
 芒野や名譽を遂げし武士の墓
 頁ふた子の手真似して居る踊かな
 鳴啼くや田越しの家の物靜かな

緑 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 隆 零 子 月 笑 庵 松 舟 丹 女

關の月は崩れたまゝや花すゝき
 朝冷も知らぬ色なり雁來紅
 今掃た庭に飄れて萩の花
 讀返す文に涙や秋の暮
 松風の奥に星あり遠きぬた
 殘る蚊や僅か一つが耳につく
 夏響めた茶屋は留守なり秋の山
 門口や柳は散りて星月夜
 足元に鳥の羽音や秋の風

三十



同 同 同 同 同 奇 同 樂 同

零 水